

大学史研究通信

第 87 号 2016 年 12 月 31 日 (土)

大学史研究会

第 87 号の内容：会員ニュース・第 39 回大学史研究セミナー報告・2016 年度総会報告・同会計報告・事務局員の退任・大学勉強会の開催・会員新刊ニュース・『獨協大学 50 年史』無料配布のお知らせ・『大学史研究』編集委員会からのお知らせ・事務局からのお知らせ・大学史研究会事務局員一覧

会員ニュース

新入会員

金 明姫 (キムミョンヒ) 会員

所属：創価大学大学院教育学専攻博士後期課程

小谷 将義 会員

所属：関西学院大学経営戦略研究科経営戦略専攻修士課程

蝶 慎一 会員

所属：東京大学大学院教育学研究科

<異動に伴う会員情報更新の届出をお願いいたします>

所属や住所等に変更のある会員は、事務局までご一報ください。ホームページ掲載の「事務局連絡先」フォーム、あるいは年会費払込票（郵便口座）の「通信欄」を利用することも可能です。

(会員情報担当：浅沼薫奈)

第 39 回大学史研究セミナー報告

2016 年 11 月 5 日 (土) および 6 日 (日)、明治大学駿河台キャンパスにおいて、第 39 回大学史研究セミナーを開催致しました。「開催校からの御礼」および「セミナー参加記」を掲載致します。

開催校からの御礼

古屋野素材 (明治大学)

まず何よりも、2016 年 11 月 5 日 (土)、6 日 (日) に、明治大学 (駿河台キャンパス) を会場として開催された「大学史研究セミナー」にご参加いただいた皆様に、心から感謝いたします。ただ、折からの学会シーズンのため、他の大規模な学会等と日程が競合したことで、大学の施設利用に関して、必ずしも希望通りの設営ができなかったり、サポートをあてにしていた院生やゼミ生も、他の学会運営に駆り出されたり、サークルの定期演奏会等の行事と重なったりで、開催校の大学史研究会員のたった一人の専任教員である私がモタモタ動かざるを得ず、全般の運営面で、色々と不行き届きがあったであろうことを、深くお詫びいたします。それでも、何とか無事に両日のスケジュールをこなせたのは、何よりも事務局員諸氏のご奮闘と、サークルの行事の合間を縫って駆けつけてくれたゼミ生たちのおかげでした。

さて内容面ですが、今回の初日の「シンポジウム」は、開催校 (結局は私) の意向をくんでいただいて、「大学史研究会の歩みを“時間軸”として、主として戦後日本の“大学史研究”の動向を振り返る」という、かなり“漠然”としたテーマを基調としていただきました。この趣旨は、決して「大学史研究会」が我が国の大学史研究の主流を担った、という認識な

どではなく、現在までの大学史研究にとって、重要な“ベース”とも言うべき、「広島大学西洋教育史（横尾）研究室」「国立研究所」「立教大学寺崎ゼミナール」「東京大学百年史プロジェクト」「広島大学大学教育研究センター（発足当時）」「大学基準協会 50 年史編纂プロジェクト」及び、多くの国公立大学の「年史編纂プロジェクト」等（順不同）の活動において、主導的役割を果たし、あるいはそこで育てられた人々の多くが、何らかの形で「大学史研究会」に去来したことは事実であることから、それぞれの研究動向や成果を、数十年のスパンで幅広く“俯瞰”し、一定の“総括”を試みるにあたって、「大学史研究会」を、そのための“サロンのステージ”と位置付けることは、それなりの意味があると思われることによります。また、上記の個々の“ベース”の背景である、「東京大学」や「新制大学」の発足や、「大学史研究会」の始原及び「大学史研究セミナー」の発足から数えて、それぞれがここ 1～2 年のうちに、「170 年」「70 年」「50 年」「40 年」の節目を迎えることも意識したのが、今回の「シンポジウム」の副題です。

ということで、今回のセミナーは、我が国の大学史研究を、「大学史研究会」の立場から、今後の研究進展のためにも、ここらで少し立ち止まり・振り返っての“総括”を試みるための、検討の枠組みについて様々な観点からのブレインストーミングができればいいなという意図を込めたつもりです。つまり、今後少し継続的に、日本の大学史研究の“歴史的考察”を試みるにあたっての、“とば口”を目指そうとするものでした。

登壇していただいた、別府・館・荒井の三会員のご報告、及びその後の質疑応答・意見交換は、開催校としては、今後の検討に向けての有益なスタートラインの設定となったといささか自負しておりますが、あるいは、若い会員諸氏や初めての参加者にとっては、年配会員の“仲間内のサロンの談義”と映ったかもしれませんね。その点に関しましては、司会者としての不行き届きをお詫びします。今回の反省踏まえて、今後のセミナーや『大学史研究』誌上において、より幅広い論議が深まることを願っております。

最後になりますが、第一日目の夕刻からの懇親会において、故・中野実会員の在りし日の「東京大学資料室」での、あの懐かしい髭面の“雄姿”が登場する VTR（NHK スペシャル『街道をゆく・本郷界限』の一部）を紹介させていただきました。この映像に初めて接する方も多かったようで、懐かしそうに見入っていらっしゃる方々の様子に、何か彼への供養を果たしたような気持になり、嬉しい限りでした。どなたかの「今回のテーマについては、中野君がいてくれたらなあ」というつぶやき。本当にそうですね。合掌。

第 39 回研究セミナー参加記

田中智子（早稲田大学大学史資料センター）

第 37 回大学史研究会研究セミナーは、11 月 5 日、6 日の 2 日間にわたり、明治大学駿河台キャンパスで開催された。筆者は 1 日目のシンポジウム、そして 2 日目の自由研究発表を拝聴したが、いずれも内容盛りだくさんの充実した報告であった。

1 日目の午後、シンポジウム『大学史（研究）』の様々な節目を迎えるにあたって：140 年・70 年・50 年・40 年」が開催された。荒井克弘氏（独立行政法人大学入試センター）・館昭氏（桜美林大学）・別府昭郎氏（元・明治大学）のお三方が登壇され、それぞれの専門分野に立脚し、様々な角度から『大学史（研究）』に関する報告をしていただけたので、大変刺激的であった。特に興味深かったのは、別府氏による「大学史研究会について」の報告である。筆者が本研究会に初めて参加してから 4 年経つが、自分が所属する研究会がどのような歴史をたどってきたのかは、恥ずかしながらほとんど知らなかった。このような学会・研究会の歴史も重要な研究史の一つでありながら、なかなか世に知られることも記録として残ることも少ないため、初期の段階から本研究会に関わっている別府氏の証言は大変貴重なものであると感じた。

2日目の自由研究発表においても、前日から二日続けての報告となった別府氏や、羽田貴史氏（東北大学）・熊澤恵里子氏（東京農業大学）・大西巧氏（京都文教大学）が登壇された。いずれも名のある大学教育・大学史研究者であり、いずれの報告も興味深いものであったが、筆者が特に関心を抱いたのは羽田氏の「大学学年暦の歴史的考察」である。日本の四月入学のシステムについては数年前、東京大学の秋入学構想とその挫折により脚光を浴び、多くの論者が四月入学の是非について語っていた。しかし、いずれも四月入学定着の歴史的経緯を十分にふまえた論ではなかったように思う。今回の羽田氏の報告は、江戸時代の寺子屋・藩校から戦後の教育刷新審議会まで、長期にわたって様々な事例・議論を取り上げながら述べられており、四月入学定着の経緯・背景についてよく理解できた。

他にも紹介したい報告は多数あるが、紙幅の都合からここまでに止めておく。今回興味深く刺激的な報告をしてくださった登壇者の方々、セミナーを企画・運営してくださった事務局の方々、そして会場を提供してくださった明治大学の方々にこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。

大学史研究会に参加して

江藤敦美（九州大学大学院統合新領域学府修士課程）

初めての、それも飛び込みで参加させていただきましたが、大変に貴重な経験となりました。ご論文やご著作の中で存じ上げていた先生方に直接お会いすることもでき、一か月たった現在でも興奮が冷めやらないような心持ちです。

特に印象的であったのは、桜美林大学の館先生による「アクティブラーニングは研究的に勉強するということであり、教師が研究を行っていないならばアクティブラーニングは成立しない」というコメントでのご発言でした。

私自身、学部時代は社会科教育実践のゼミを専攻していたため、実際に教育の現場で学ばせていただく機会が何度かありました。そしてその数回の中でも、理論と実践の乖離について考えさせられる場面が少なからずありました。近年、教育におけるキーワードとして「アクティブラーニング」がもてはやされているという印象を受けますが、実践の場での理解は生徒のみならず教師においてもまだまだ浅いという現状があります。その問題意識へのアプローチとして、生徒に主体的な学習姿勢を身に付けさせるにはまず教師が行動すべき、とぼんやりとした認識がありましたが、その行動こそが「研究」であるのだと自分の中でしっくりくるものがありました。

社会科における歴史教育の意義というのはなかなか生徒に伝わりづらいというのが現実ですが、自らの通う学校の歴史、すなわち身近な自校史であればその捉え方が全く違ってくると思います。そういった意味で大学史研究、広く学校史研究はとても実際的な教育研究であり、今後の展開に自らも積極的に関与させていただきたいと強く感じました。

厚かましくも懇親会まで参加させていただきましたが、一日を通してこの上なく刺激的な学びのときでありました。本研究会にて吸収させていただいたことをしっかり自分の中で整理し、ご一緒させていただいた先生方とのご縁を尊び、日々の研究に精進して参りたいと思います。

2016年度総会報告

第39回大学史研究セミナーに引き続き、2016年度の総会が開催されましたので、その議事録を掲載致します。

大学史研究会 2016年度総会議事録

日時：2016年11月5日（土）

会場：明治大学駿河台キャンパス リバティタワー2階 1022教室

1. 2016年度の活動

1.1 事業報告

岡田局員より、紀要『大学史研究』第26号を今年度中に刊行する旨の報告があった。

1.2 2016年度決算の報告・会計監査報告

会計担当の山崎局員より決算報告が行われた。続いて、監査の吉野剛弘会員より、今年度も問題なく会計業務が執行されていることが報告された後、決算が承認された。

なお、会計報告に際し、会員数の増減等の情報も報告して欲しい旨、意見があった。

1.3 その他

五島敦子会員の退任に伴う後任補充について、山本尚史会員を新事務局員とすることが承認された。

2. 2017年度の活動

2.1 2017年度の予算

山崎局員より来年度予算案が提案されたのち、全会一致で承認された。

2.2 紀要『大学史研究』第27号、28号について

掲載する論文を募集している旨、報告があった。

2016年度会計報告

大学史研究会 2016年度会計及び、2017年度予算案につきまして、以下に概要をご報告いたします。

2016年度の収支報告

【収入】

2015年度会計からの繰越金は、5,087,114円でした。2016年度年会費につきましては76名の会員より納入いただき、年会費・入会金の納入総額は、545,000円でした。年会費の納付率自体は64%です。前年度のセミナーは、大規模なセミナーだったにも関わらず、五島会員のご尽力によって南山大学の支援金を受けて開催することができたため、589円の収入となりました。2016年度の総収入額としましては、5,633,721円、前年度繰越金を除いた実収入額は、546,607円でした。

年会費をお納め下さった会員各位におかれましては、この場を借りてお礼申し上げますとともに、今後も引き続き研究会の発展と円滑な運営のため、年会費納入に対するご理解ご協力をお願い申し上げます。

【支出】

2016年度の支出は、編集委員会会議費・交通費は、31,350円、印刷費は、10,203円です。これは「大学史研究通信」発行の印刷、会員への諸連絡の印刷物、年会費納入依頼通知の印刷等に関わる経費です。通信費の支出は、58,452円です。これは、「大学史研究通信」の発送、年会費納入依頼通知の発送、セミナーの出欠調査ハガキや、その他宅配便等の経費です。消耗品費・手数料は、1,164円です。これは、事務局運営にあたっての文房具・ラベル・用紙・送金手数料等の経費にあたります。

次年度繰越は、5,532,552円、来年度繰越金を除く総支出は101,169円でした。繰越金を

除く収支の差は、445,438 円のプラスとなりました。ただし、2016 年度は学会誌の出版がなかったため、学会誌出版があったことを仮定すると 15 万円程度のマイナスになります。

「2016 年度会計報告」に明記されているとおり、当該年度の会計は吉野剛弘会員に監査を依頼し、精細な監査の上会計の適正処理をご承認いただきました（9 頁参照）。御多忙のところ監査業務を賜りました吉野会員には、この場を借りてお礼申し上げます。

2017 年度の予算案

大学史研究会では、次年度の予算案につきましては、事務局による基本案を総会に提示し、ここでの審議を経て、最終決定をいたしております。例年と同様、2017 年度予算も上記の手順にしたがって予算案（9 頁参照）を決定しましたので、以下にご報告いたします。

【 収入案 】

収入は、年会費と紀要売上金の 2 つになります。とりわけ、本研究会の運営経費は、年会費の納入に大きく依存しております。

年会費につきましては、550,000 円を収入予定額として設定いたしました。繰り返して恐縮ではありますが、2017 年度も会員各位のご理解ご協力をお願い申し上げる次第です。総収入額は 6,103,552 円、繰越金を除く総収入額は 571,000 円といたしました。

【 支出案 】

支出案は、例年の予算案で設定している支出項目と支出額を考慮しつつ、算出いたしました。『大学史研究』を発行する予定になっております。その発行経費（制作・印刷・発送費の総計）を 600,000 円計上しました。編集委員会会議費・交通費は 50,000 円、事務局会議・交通費は 40,000 円としました。その他の諸経費も、ほぼ例年通りの額を計上しております。消耗品費・手数料は 10,000 円、謝金は 30,000 円、印刷費は 50,000 円です。通信費は 90,000 円でこれはホームページの費用も含んでいます。また、予備費として 300,000 円を計上しております。2016 年度から次年度への繰越金は 4,933,552 円、繰越金をのぞく総支出予算案は 1,170,000 円を予定しております。

本研究会におきましては、全体として緊縮財政をうたってはおりますものの、研究会として有益と認め得る支出につきましてはやぶさかではありません。大学史研究会の発展のため、あるいは、会員サービスのために必要な支出の要請がありました際には、事務局で検討し、それが妥当であると判断した場合には、これにお応えしていきたいと考えております。今後とも会員各位からのご提案ご教示を歓迎いたしますとともに、研究会の将来的なビジョンも併せてご検討いただければ、幸いに存じます。

以上、「2016 年度会計報告」および「2017 年度予算案」につきまして、ご質問ご提案等ございましたら、事務局までご連絡のほどよろしくお願い申し上げます。

（会計担当：山崎慎一）

事務局員の退任

これまで長年にわたって事務局を支えてくださいました、五島敦子先生と井上美香子先生が、先日ご退任されました。これまでのご尽力に心より御礼申し上げます。

事務局退任にあたりまして

五島敦子（南山大学短期大学部）

2010 年より、大学史研究会事務局員として「大学史研究通信」を担当させていただきました。これまでの 6 年間に、日米の大学と地域の関係をテーマにしたシンポジウム（第 35 回）、ウィスコンシン大学アダム・R・ネルソン先生の招聘講演（第 36 回）、南山大学でのセミナ

一開催・若手研究者の集い（第38回）など、数多くの活動の場を与えていただきました。また、東北大学高等教育開発推進センター(当時)主催・大学史研究会共催の企画として、ロジャー・ガイガー先生招聘のためにペンシルバニア州立大学を訪れ、訪日の際に東京から仙台までお供したことも、かけがえのない経験となりました。この場をお借りして、みなさまに厚く御礼申し上げます。

このたび事務局を退任させていただく理由は、2017年度に1年間の研究留学を予定しているためです。研究テーマは「戦間期アメリカの大学拡張運動」です。これまで私は、ウィスコンシン大学を事例として、University Extension/Continuing Educationの成立史を研究してきましたが、今回は、その後に運動が全国に拡大していく経緯を探求したいと考えています。また、日米科学交流の先駆けとしての「ロックフェラー・フェロー」についても、関心をもっています。

研究留学では、前半の9ヶ月をウィスコンシン大学でネルソン先生に受け入れていただき、後半の3ヶ月は東京大学で福留先生にお世話になる予定です。ネルソン先生は、現在、UW-Madison Educational Policy Studies(EPS)の学科長となられ、2015-2016年度のHistory of Education Society(HES)の会長も務められるなど、学内外で活躍されておられます。福留先生は、私などが申し上げるまでもなく、高等教育研究・大学史研究の中核として若手の育成にもとりくまれておられます。

このようなすばらしい先生方との出会いの機会を得ることができたのも、まさに大学史研究会のおかげです。心から感謝申し上げます。今後も大学史研究会の活動に参加していく所存ですので、ご指導いただければ幸いです。

事務局退任につきまして御挨拶申し上げます

井上美香子（九州大学百年史編集室）

この度、大学史研究会事務局を退任させて頂くことになりました。会員の皆様、事務局員の皆さまにおかれましては大変お世話になりました。2008年度より『大学史研究通信』の編集を担当、2011年度からはセミナーを担当させて頂きました。就任当初、事務局員のなかで大学院生は私一人だけだったので緊張と不安があったのですが、『大学史研究通信』やセミナーでの新企画など研究会の今後の運営について自由に意見を述べる事ができる事務局の空気に触れ、その心配もすぐに吹き飛んでしまったことを覚えています。あれから8年が経過し、事務局員の交代もありましたが、大学史研究会事務局の良い意味での“自由”な雰囲気は変わることなく受け継がれています。こうした中で、事務局員として研究会の運営に携わることができたことは、私にとって非常に幸運なことだったと思います。

セミナーでは、「日米における大学と地域社会の関係」（2012年第35回シンポジウム）、「大学の存在意義を問うー大学と地域社会との関係からー」（2014年第37回シンポジウム）と、2回にわたるシンポジウムの企画をとおして大学と地域社会をめぐる関係について検討する機会を頂きました。九州大学のキャンパス移転に伴い、100年の歴史を刻んだキャンパスが消えてゆくなかで新たなキャンパスとそれをとりまく地域社会が形成されていく過程が同時に進行してゆく様を目の当たりにし、大学が存在することの意味を地域社会との関係から改めて検討したいと考えていた頃でした。このような貴重な機会を得ることができましたこと、ここに改めて御礼申し上げます。

事務局での活動を通して得ることができた貴重な経験、セミナーの開催を通して出会うことができた先生方、そして、心温かい事務局員の方々とともに仕事ができること、その全てに感謝申し上げたいと思います。

事務局は退任いたしますが、これからも大学史研究会の活動には積極的に参加させて頂きたいと存じますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

大学史勉強会の開催

大学史を専門とする（これからしようとする）研究者のために、勉強会を開催しようかと考えております。この勉強会では、海外の研究紀要の紹介を通じた研究動向の把握と、大学史をテーマとした授業の実践例を共有することから始めます。海外の研究紀要に関しては、着手の一段階として *Perspectives on the History of Higher Education* の目次・論文紹介を行い、授業の実践例については実際に大学で大学史を取り入れた授業を行っておられる方にその内容・方法をうかがうことにしたいと思います。初回は今後の日程調整、担当割を行いたいと思いますので、参加されたい方は以下の日程でお集まりください。

記

日時：2月23日（木）18:30～

場所：中央大学後楽園キャンパス 6号館（JR「水道橋」地下鉄「春日」「後楽園」下車、教室番号は6号館1階エレベーター付近に掲示・ホームページ等でお知らせします）

連絡先：岡田大士(daishi@home.nifty.jp)

なお、情報蓄積のために、Facebook にグループページを用意しました。合わせてご利用ください (<https://www.facebook.com/groups/daigakusi/>)。

会員新刊ニュース

別府昭郎『大学改革の系譜－近代大学から現代大学へ－』東信堂、2016年。

Roy Lowe, Yoshihito Yasuhara, *The Origins of Higher Learning: Knowledge Networks and the Early Development of Universities*, Routledge, 2016.

『獨協大学五十年史』無料配付のお知らせ

『獨協大学五十年史』（2016年3月刊行）は、本学創立50周年記念事業の一環として、大学創設から創立50周年を迎えた2014年度までの歴史を、多くの資料をもとに通史として総括し発刊したものです。本学の「建学理念」に照らして獨協大学の将来方向を差し示し、進むべき道を構想する基礎資料とすべく編纂されました。

2008年10月に「編纂準備部会」、2013年4月に「編纂委員会」を発足させ編纂にあたりました。編纂室などの専門部署がない中での作業であったため、事柄に関する適切な資料が見つからないなど、不十分な点も多々ありましたが、大学50年の歴史的記録の集大成となっております。日本の大学史を研究されている、また周年史にご興味のある方がいらっしゃいましたら、下記までご連絡ください。また、本書の内容に関する感想については、堀までご連絡ください。連絡先については、大学史研究会の名簿（2015年版）に記載しております。



申込方法：下記の URL にあります「申し込みフォーム」からお申込みください。

<http://www.dokkyo.ac.jp/news/detail/id/6751/>

費用：年史本体は無料で提供いたします。送料のみご負担頂きます。

発送方法：宅配便（着払い・60サイズ）にてお送りします。

問合せ先：獨協大学総合企画課（電話：048-946-1635）

『獨協大学五十年史』編纂委員会編『獨協大学五十年史』学校法人獨協学園獨協大学、2016年、上製本、A4、278頁。

『大学史研究』編集委員会からのお知らせ

遅れております『大学史研究』26号、27号の編集作業を行っております。投稿を希望されている方は、岡田まで (email:daishi@home.nifty.jp) ご連絡ください。

(紀要担当：岡田大士)

事務局からのお知らせ

このたびは大学史セミナーにご参加くださり、ありがとうございました。開催校を引き受けてくださいました古屋野先生、ご登壇いただいた荒井先生、舘先生、別府先生には厚くお礼申し上げます。徐々に若手会員が増えつつある大学史研究会において、そのルーツを知っていただくよい機会になったのではと考えております。今後とも後輩会員への叱咤激励をお願いいたします。

事務局体制としては、五島さんに代わり山本さんに加わっていただくことになりました。また総会后ではありましたが、井上さんから退任の希望を伺いまして、代わりに船勢さんに入っていただくことになりました。井上さんの件も併せてお認め頂ければ幸いです。山本さん、船勢さんは両名とも、今後の大学史研究会を支えていただく重要な若手研究者であります。どうぞよろしくをお願いいたします。

別記事にいたしますが、若手研究者が先行研究を勉強したり、発表練習をしたりするための勉強会の場を用意してみようと思っております。第0回として、2月末に中央大学後楽園キャンパスの教室を借りて打ち合わせをしたいと考えておりますので、ご興味のある方はぜひご参加ください。

(事務局代表：岡田大士)

編集後記

年末にお送りするはずであった第87号をお送り致します。刊行の遅れをお詫び申し上げます。また、これまで事務局を支えてくださった五島先生と井上さん、本当にどうもありがとうございました。

(通信担当：長谷部圭彦)

『大学史研究通信』第86号の編集は、事務局・長谷部圭彦が担当いたしました。

連絡先：hasebekiyohiko@hotmail.com

『大学史研究通信』第88号は、2017年2月28日発行予定です。

大学史研究会事務局

<事務局連絡先>

〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1

中央大学法学部 研究室受付 岡田大士気付 大学史研究会

Tel&Fax: 042-674-3151 E-mail: daishi@home.nifty.jp

ホームページ <http://daigakushi.jp/>

事務局へのお問い合わせは、なるべく下記代表 E メールアドレスまでお願い致します

E-mail: jshshe@daigakushi.jp

大学史研究会事務局員 (五十音順)

浅沼 薫奈 (大東文化大学)

岡田 大士 (中央大学)

長谷部 圭彦 (早稲田大学)

深野 政之 (大阪府立大学)

船勢 肇 (大阪芸術大学・阪南大学)

山崎 慎一 (桜美林大学)

山本 尚史 (長崎女子短期大学)

大学史研究会 総会 資料 (2016年11月5日：明治大学)

大学史研究会 2016年度 会計報告

(自2015年10月1日～至2016年9月30日)

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	¥ 5,087,114	編集委員会構費・交通費	¥31,350
年会費等	¥545,000	消耗品費・手数料	¥1,164
セミナー収入	¥589	印刷費	¥10,203
利息	¥1,018	通信費	¥68,452
計	¥ 5,633,721	次年度繰越金	¥ 5,532,552
		計	¥5,633,721

前年度繰越金を除く総収入

¥546,607

¥101,169

上記差引

¥445,438

上記のとおり、ご報告いたします。 事務局会計担当 山崎慎一

上記の会計報告について会計監査を実施した結果、領収書ならびに預金通帳等は、全て妥当かつ正確に処理されていることを認めましたのでご報告いたします。

会計監査



2017年度 予算案

収入の部		支出の部	
費目	金額	費目	金額
前年度繰越金	¥5,532,552	雑誌「大学史研究」関連費用	¥600,000
年会費・入会金	¥550,000	編集委員会会議費・交通費	¥50,000
「大学史研究」売上金等	¥10,000	事務局会議・交通費	¥40,000
セミナー開催経費等戻し入れ	¥10,000	消耗品費・手数料	¥10,000
利息	¥1,000	謝金(アルバイト)	¥30,000
		印刷費	¥50,000
		通信費	¥90,000
		予備費	¥300,000
		次年度繰越金	¥4,933,552
計	¥6,103,552	計	¥6,103,552
前年度繰越金を除く総収入	¥571,000	次年度繰越金を除く総支出	¥1,170,000